

世界に冠たる名器

「ザ・シンフォニーホール」誕生秘話 vol.3

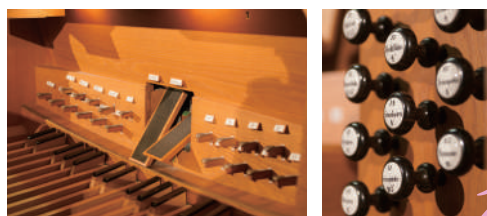
ザ・シンフォニーホール

巨大な名器を鳴らす 「パイプオルガン」

当時、日本にはなかった本格的なクラシック音楽専用ホールとして誕生した「ザ・シンフォニーホール」。

最高水準の響きを求めた開発者たちの誇りを象徴するのが正面に凛として佇む「パイプオルガン」である。

巨大な名器「ザ・シンフォニーホール」と共鳴し、あたたかも楽器の中にあるような感覚に陥るオルガンの魅力と、その幻想的な響きを生み出す匠たちの物語を探る。



指揮者のように音を操るパイプオルガン。 *Point*

三段の手鍵盤の下には、音色の組み合わせを512通りも記憶させるコンビネーションボタンを設置。低いパイプを鳴らす足鍵盤、音量を調節するペダル、音色を変えるストップなど、さまざまな機能を操り音色を生み出す。

Point 2

内部に残されたカラヤンの音。
オルガン内部には、1984年10月16日、カラヤンのオルガンに関する指示を記した津田氏のメモが残されている。



ザ・シンフォニーホールの客席への扉を開くと、誰もがパイプオルガンの堂々たる存在感に圧倒されずにはいられない。

「3732本のパイプをもつ、これだけ本格的なオルガンなら、ルネサンス期から近現代まで、幅広い音楽を演奏できます」

そう語るのは、ザ・シンフォニーホールで20年以上、パイプオルガンの音を守り続けて来たヤマハ株式会社都留裕幸氏。その音色の特徴について「透明感のある明瞭な音が魅力。ホールがアリーナ型なので、クリアな音が客席のすみずみまで届きます」と話す。この美しい音を実現するための鍵となるのが、建造時の整音作業。職人たちの手により、何千もあるパイプの一本一本

を削り、カーブを調整して音を決めてゆく。実に気の遠くなるような緻密な作業が繰り返され、オルガンの音は完成される。都留氏いわく「オルガンビルダーの仕事においては、建造後の技術者の音づくりこそが、匠の技。建造後の調律は、ピアノの調律師のように良い音を新しく作り出すのではなく、彼らが理想とした音を読み解き、同じようにオルガンづくりを理解して調整する作業なんです」

ザ・シンフォニーホールの音を創ったのはスイスの技師バウマン氏。彼が生み出した音を、オルガンに触れ、対話しながら守り続ける。その高度な作業こそ、やはり「匠の技」に他ならないだろう。

古今変わらぬ”匠の技“が成せる
最高の響きをもつパイプオルガン。

日本のホール事情を大きく変えた 開発者たちのオルガンへの情熱。

ザ・シンフォニーホールのパイプオルガンは高いクオリティで知られるスイス・クリーン社製だが、製品精度が高いだけではオルガン導入の成功にはならないと都留氏は言う。

「このホールの場合、非常に高い精度で管理されており、常に調律に専念できます。建造時のオルガンビルダーの技術力もさることながら、ホール開発者たちが、オルガンに最適な環境をしっかりと整備されたから、美しく鳴り続けているのでしょう」

ザ・シンフォニーホールでは当初、パイプオルガンは電気式のものを採用する予定だったという。だが、日本楽器製造株式会社（ヤマハ株式会社の前身）の津田祐雄氏による熱心な提案と、ヨーロッパ視察旅行を経てその重要性を痛感したホール開発者たちの情熱によって、本格的なオルガンの導入が決まった。

「私の先代にあたる津田が、精力的にお勧めしたと聞いております。それまで日本にはなかった本格的なクラシック音楽専用ホールを創りたいという強い想いを、ホールの建設に関わられたすべての人たちが共有され、その夢の実現のため熱心に取り組まれたからこそ、この素晴らしいパイプオルガンは生まれました」

かくして、ホールに本格的なパイプオル

ガンを設置できることが、日本で初めて証明されることになった。

「ホールにオルガンを据えるというのは、クラシック音楽をどう捉えるかという精神性の顕れです。オルガンはその魂、音楽への誇りなのです。ザ・シンフォニーホールはパイプオルガンの草分け的存在。ここがなければ、日本のホール事情も大きく変わっていたのではないのでしょうか」

事実、この後、続々と日本各地の音楽ホールに本格的なパイプオルガンが導入された。ザ・シンフォニーホール中央に据えられた風格のあるパイプオルガンは、まさに日本のホール史に新たなページを開いたと言えるのではないかと。

残響2秒の楽器の中に入り込んだような ホール中が鳴り響くスペクタクルな体験。

観客にとって、ザ・シンフォニーホールのパイプオルガンの魅力とは何だろう。

「とにかく3732本のパイプの生音を体感してほしいです」と都留氏。パイプオルガンはオーケストラやピアノとは違い、沢山のパイプが鳴らす音を楽しむものだ。

「残響2秒のザ・シンフォニーホールでパイプオルガンが鳴り響く。それはまるで巨大な楽器の中に自分たちも入り込んで音を聴くような幻想的な体験です。地鳴りのような低い音や、キラキラと輝く高い音など、他の楽器では表現できない素晴らしい音を、ぜひホールで体感してほしいです」

さらに都留氏は熱く語る。

「パイプオルガンの演奏は、沢山のノブを動かしたり、凄く速さでペダルを両足で踏んだり、スペクタクルな動きは、まるでひとりオーケストラ。その姿を視覚的にも楽しんでいただきたいです」

「クラシックの殿堂」と称されるザ・シンフォニーホールにふさわしい本格的なパイプオルガン。その完成は、開発者やその響きを守り続ける人たちのゆるぎない誇りと情熱、匠の技が成し得た宝物。ホールを鳴らす美しい音色は、関わったすべての人々の想いと共に、今日も響き続けている。



Point
一つの音を一つのパイプで表現。
フルート、クラリネット、トランペットなど音色は多彩。

風をパイプに送り、空気を振動させて音を出すパイプオルガン。外に見える長いパイプは低音のもの。パイプが短くなるほど高音になり、内部にも様々なパイプが並ぶ。54もあるストップで、フルート系、プリンスバル系などさまざまな音色を混ぜて、幻想的な音が生み出される。

Profile



都留裕幸
ヤマハ株式会社 オルガンビルダー

日本で数少ないオルガン技術者の一人。フランスのオルガン建造者資格を取得。ザ・シンフォニーホールの調律、メンテナンスに携わる。

オルガンビルダーの必需品。パイプの埃を払ったり、突き刺して音を止めたりするガチョウの羽、三角が特徴的な調律時に活躍する道具など。

